

“吾が思ひ出の記”

加藤 清吉

はしがき

永年の念願が達成されたのを喜ぶ心で一杯である。

私の生ひ立ちより今日迄歩いて来た道は主觀的に見て長い時間であつた、忘れてしまつた事、思ひ出せない事どもが多い、客觀的には悠久の宇宙に比して瞬時に過ぎない。

同時に私の踏んで来た足跡は果しなくひろがる大空に瞬く星の運行にも似た些々たる業であつた。唯々明治、大正、昭和の三つの聖代を、自己の信ずる道一筋に突き進んで来た越し方を顧り見て無量の感を思ふのみである。

此處に“思ひ出の記”をものする所以のものは今迄經驗し來つた

人生行路難の諸相を赤裸々に記述して、子女に教へ私の店に勤務する“これから”の店員諸君に對して他山の石としたいからである。たゞだそれだけである。

昭和十二年盛夏

加藤清吉

目次

はしがき	一
父祖の業	一
幼年時代	五
春は父の背に乗って	五
オカツパと小遣錢	八
列をなして電柱に耳を當る	九
四季行樂の情景	十一
排外思想とキリスト教	十三
濃尾大地震と著者	十四
學業の事	十六